

# 隠岐の島町西郷港周辺地区の地域形成史 -住民の地域認識との対照・分析に向けて-

杉本 達宏<sup>1</sup>・福島 秀哉<sup>2</sup>

<sup>1</sup>学生会員 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻  
(〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:sugimoto-tatsuhiko868@g.ecc.u-tokyo.ac.jp)

<sup>2</sup>正会員 博士(工) 株式会社上條・福島都市設計事務所  
(〒162-0065 東京都新宿区住吉町10-5, E-mail:fukushima@kfa.co.jp)

まちづくりへの住民の主体的な参画を実現するためには、地域の社会・空間の形成史や現代のコミュニティの特徴を丁寧に把握した上で、それに基づく住民の地域認識や地域への帰属意識を考慮し、地域の特徴を計画の内容や参加のプロセスに反映することが重要である。本研究では歴史的な独自の空間や文化・コミュニティを保存する一方で高度成長期以降の急激なインフラ整備・地域骨格の改変を経験した隠岐の島町西郷港周辺地区の4町を対象とし、空間的な地域形成の歴史からみた各町の特徴、また西郷港周辺地区全体の空間構造の変遷を明らかにし、計画反映に向けて住民の地域認識と対照する際に考慮すべき点についても明らかにした。

**キーワード**: 地域形成史, 地域認識, 隠岐の島町

## 1. はじめに

### (1) 背景

近年、まちづくりへの住民の主体的な参画への社会的要請が高まっている。これを実現するためには、地域の社会・空間の形成史や現代のコミュニティの特徴を丁寧に把握し、それに基づく住民の地域認識や地域への帰属意識と適切に対照した上で解釈し、地域の特徴を計画内容や住民参加の手法に反映することが重要と考えられる。

本研究は、島根県隠岐の島町の中心地域である西郷港周辺地区を研究対象とする。本地区は近世村を起源とする4つの町からなる地域である。4町はそれぞれ山や川といった自然地形によって隔てられるため、近世以前からの歴史を持つ町の骨格が現在まで保存されている。近年の行政によるまちづくりの計画においても、「みち」「かわ」「台地」といった自然の空間構造についての理解を基にまちづくりを行ってゆく姿勢が見られる。また空間的構造のみならずコミュニティや生業に関しても、4つの町は比較的独立した状態で発展してきた歴史を持つ<sup>1)</sup>。

こうした背景の下で、4町の住民の地域認識や地域への帰属意識に関しても、町の形成史への理解や、歴史の中で形成された地域行事、サロン活動等の地域活動に影響され、4町それぞれの独立性と特徴を持つことが予想される。

一方で、隠岐は1953年の離島振興法制定以降の離島振興政策の影響もあり、道路や宅地開発等のインフラや公

共施設の整備が、特に1960年代、70年代に急激に起こっている。こうした都市空間の整備は近世以前からの住民の生活や生業、地域活動を変化させ、少なからず地域認識や地域への帰属意識に影響を与えたと考えられる。

近年、西郷港周辺地区では少子高齢化や中心市街地の衰退に対する施策として、それぞれの歴史を持つ4町にまたがる地域の中心を作り出し、交流機能を強化するための公共施設や都市空間の再編が行われようとしており、計画策定においては住民参加も積極的に取り入れられている。上記のような背景を持つ対象地域において主体的な住民参画を推進するためには、各町の近世以来現在までの地域の空間構造の変遷を通時的に把握し、それとともに変遷した歴史的なコミュニティのあり方を丁寧に把握した上で、現在の地域住民の地域に対する認識や地域への帰属意識を適切に解釈し、地域の特徴を計画内容や住民参加のプロセスに反映する必要がある。

### (2) 目的

以上を踏まえ、本研究は隠岐の島町西郷港周辺地区を対象とし、住民の地域認識、地域への帰属意識との対照・分析の前提となる地域形成史を記述し、またその特徴から、形成史を認識と対照する際に考慮すべき点について明らかにすることを目的とする。特に道路や市街地の形成年代、また重要な公共施設の整備の歴史に着目して、4町からなる対象地域の歴史的な空間構造の変化を明ら

かにし、認識との対照・分析に向けた知見を得る。

### (3) 手法

国土地理院発行の旧版地図、空中写真等を用いて対象地の空間（主要街路と市街地）形成史を整理し、面的な歴史的景観特性のアセスメント手法であるHLC(Historic Landscape Characterization)の手法を簡易的に用い、都市空間の大まかな構造の変遷を明らかにする。また対象地域の空間構造に影響を与えるインフラや公共施設の整備の歴史を行政の資料等を用いて整理し、対象地域の4町のより詳細な都市構造の変化を明らかにする。使用した主な文献資料、図面資料を表-1、表-2に示す。表-2中『隠岐三町略図面』は作成年不詳だが、資料中の陣屋施設への言及から江戸期の作成であることが推定できる。

表-1 使用した主な文献資料

著者・編者	発行年	名称
隠岐支庁	1972	隠岐島誌全
大西音吉	1920	西郷町誌
田中豊治	1979	隠岐島の歴史地理学的研究
隠岐の島町		隠岐の島町 広報誌

表-2 使用した主な図面・写真資料

著者・編者	発行/測量/撮影年	名称
不詳	不詳	隠岐三町略図面
川岡清助	1894	島根県管下隠岐国全図
国土地理院	1934	旧版地図
国土地理院	1971	旧版地図
国土地理院	1978	旧版地図
国土地理院	1988	旧版地図
国土地理院	1998	旧版地図
国土地理院	1948	空中写真
国土地理院	1965	空中写真
国土地理院	2005	空中写真

### (4) 既往研究と本研究の位置づけ

#### a) 地域住民の地域認識について

地域住民による生活空間の認識を対象とする研究には、空間に紐づいた景観価値を研究対象とし、地図に基づいた場所への愛着の尺度と景観価値の関係を明らかにしたBrownの研究<sup>2)</sup>等がある。

#### b) 地域認識・帰属意識と社会・空間形成との関係

日本の伝統的村落における空間に対する住民の認識を扱う領域に村落空間論がある。福田<sup>3)</sup>、市川<sup>4)</sup>は、伝統的集落では地域の境界や中心に関する空間認識に生業や信仰、地域活動の社会的単位等に関する地域社会の特徴が表れることを指摘している。山本ほか<sup>5)</sup>はこうした知見を基に、複数集落を対象とし、各集落の社会・空間の形成史から地域住民の空間認識を解釈し、地域の境界に対する認識の要因を明らかにした。また地域の中心に関する認識から地域活動の運営を担うコミュニティの単位や、

関連する施設の場所性を読み取れる可能性を指摘した。以上の既往研究から、集落の空間形成と認識を対照し地域社会の特徴を解釈するとき、地域の中心や境界についての認識を把握することが有効であることがわかる。

また、まちづくりへの住民参加において、社会的・空間的な地域形成の特徴を明らかにした上で、地域住民が帰属意識を持つコミュニティ単位を把握することの重要性を示した研究に福島ほか<sup>6)</sup>の研究がある。この研究では東日本大震災で被災した2地区を対象とし、コミュニティ形成史の特徴を整理した上でそれぞれの地区の復興プロセスと住民参加の特徴を分析し、コミュニティ単位の構造を把握しその特徴に沿って計画策定における住民参画の場を設定することの重要性を指摘している。

#### c) 地域形成史の評価・可視化手法に関する研究

本研究で簡易的に用いる面的な歴史的景観特性のアセスメント手法、HLCは、ランドスケープの歴史的特性の評価手法としてイングリッシュ・ヘリテージによって1999年までに確立された手法である<sup>7)</sup>。もともと田園地域の景観を評価するための手法として確立されたが、市街地や街路の形成年代特定と可視化のための手法としても使われている<sup>8)</sup>。本研究では地籍図等の代替として旧版地図や空中写真を用いて市街地や街路の変遷を評価する。

#### d) 隠岐の島町を対象とした研究

今回の研究の対象である隠岐の島町を対象とした研究には、田中による地理学的研究<sup>9)</sup>や、小坂による研究<sup>10)</sup>などがある。隠岐の島町でのまちづくりや観光を対象とした研究には、大学院生の現地でのまちづくり活動をソーシャル・キャピタル論等の社会学的枠組みで整理した島田ほかの研究<sup>11)</sup>や、隠岐旅工舎を対象として、着地型観光の可能性について論じた小林の研究<sup>12)</sup>がある。

#### e) 本研究の位置づけ

以上の既往研究を踏まえ、近世村由来の歴史的な地域性を持つ4町が近接して一つの地域を作り上げる隠岐の島町西郷港周辺地区において、住民の地域認識、地域に対する帰属意識を適切に解釈し各町の特徴を計画策定に反映することを見据え、中心や境界をはじめとした地域の広がり方に着目して地域の空間形成史を通時的に記述し、形成史を認識と対照する際に考慮すべき点について明らかにすることが本研究の意義である。

## 2. 隠岐の島町西郷港周辺地区の形成史

### (1) 島根県隠岐の島町の概要

島根県隠岐の島町は、日本海に位置する隠岐諸島の主島である島後の全域を占める自治体で、人口は13,641人（令和4年7月末時点）である。

先史時代の遺跡としては縄文時代前期の遺跡があり、また隠岐で産出された黒曜石が日本各地の縄文遺跡から出土している。中世においては後鳥羽上皇や後醍醐天皇の配流地となったことが有名である。近世においては後述するように北前船の寄港地として栄えた歴史を持つ。

町の特徴ある産業としては漁業が挙げられる。隠岐近海は対馬海流の影響を受けた好漁場となっており、近世においては対中国の輸出品である長崎俵物の産地となるなど、町にとっての歴史ある基幹産業となっている。

また、特異な地質現象、独自の生態系、黒曜石を媒体とした交流によりもたらされた文化の継承などが評価され、2013年に全域が世界ジオパークに認定されている<sup>13)</sup>。

## (2) 西郷港周辺地区の概要と歴史

### a) 西郷港周辺地区の概要

今回の研究対象である西郷港周辺地区は近世以前から島後ならびに隠岐諸島の政治・経済的な中心として発達した地域である。現在も本土や島前とを結ぶ旅客船が就航する西郷港が位置し、図書館や裁判所、隠岐支庁なども位置する隠岐の島町並びに隠岐諸島の中心地区である。

なお本研究で西郷港周辺地区と称する範囲は、近世の矢尾村、目貫村、東郷村宇屋町、指向の4つの地域に由来する範囲であり、現在の隠岐の島町西町、中町、東町、港町のそれぞれ一部である(図-1)。

### b) 西郷港周辺地区の歴史と空間の変遷

西郷港周辺地区と島後に関する年表を表-3に示す。ま

た、旧版地図と過去の空中写真を用いて、西郷港周辺地区の街路形成年代と市街地の大きな形成年代を明らかにしたのが図-2である。

隠岐は1638(寛永15)年に全体が幕府により天領とされてから、以後近世の間を通して松江藩領地の天領だった。西郷には陣屋がおかれ隠岐の政治上の中心地となった。

近世末期の文政期ごろになると沖乗り航路が北前船の主要航路となり、南東に開いた湾に位置する西郷は風待ちの港として栄えた。隠岐では北前船に誘発される形で発展した出雲や伯耆など対岸の本土との廻船商売や、長崎への対中国の輸出品の輸送など、小規模な廻船業が発達し経済が発展した。また、北陸や大阪の民謡や祭りが地域に根付くなど文化面でも北前船の影響は大きかった。

1892(明治25)年に西郷を訪れたラフカディオ・ハーンは『日本警見記』の中で、「西郷の町は、少からず自分を驚かした。大きい漁村に過ぎないと思つて居たのが、実際に来て見ると、境港よりも、一層大きく、且つ奇麗で、どの点を見ても繁華である」<sup>14)</sup>と記しており、北前船の寄港地となったことの経済・文化的な影響が窺える。西郷は明治30年ごろまで北前船の風待ち港として栄えた。

1953(昭和28)年に離島振興法が成立すると、隠岐は第一次指定を受け基盤整備が推進された。これにより西郷港周辺地区のインフラや都市空間は大きな変容を遂げた。主なものを挙げれば、西郷の港湾・漁港整備、幹線道路整備などである。港湾整備においては、旅客埠頭、海上保安庁埠頭、木材埠頭、工業製品を扱う埠頭などに機能

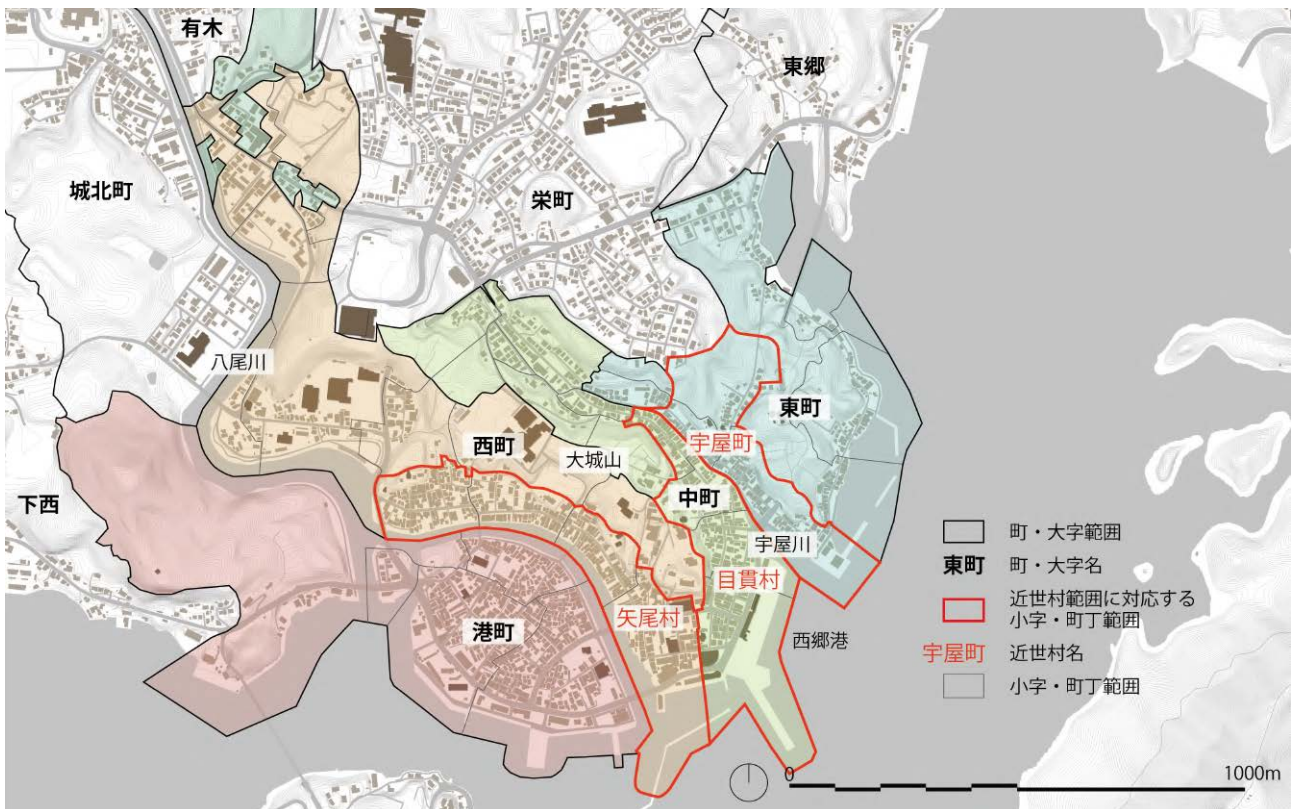


図-1 西郷地区の町の位置と近世村落の範囲(基盤地図情報をベースに加筆。町・大字、小字・町丁の範囲は地図マピオン(<https://www.mapion.co.jp>)より。近世村に相当する範囲は隠岐三町略図面(表-2 参照)より。)

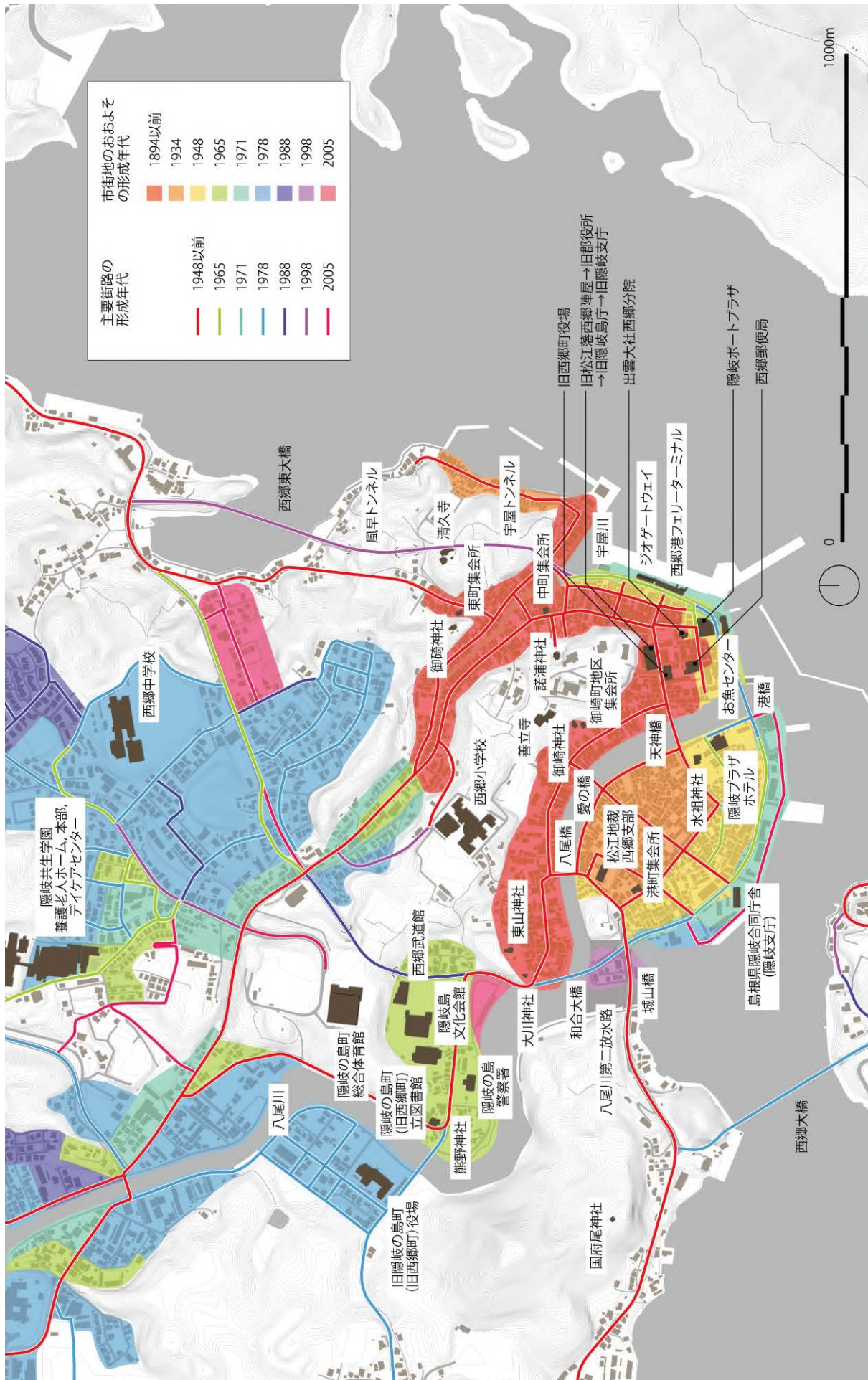


図-2 西郷港周辺地区の主要街路の形成年代と市街地のおよその形成年代  
 (基盤地図情報をベースに表-2の地図・写真資料から筆者作成)

表-3 西郷港周辺地区と島後の近世以降のできごと

西暦	和暦	西郷・島後のできごと
1583	天正11	国府尾城落城，吉川毛利氏の支配下に入る
1600	慶長5	堀尾氏の支配下に入る
1621	元和7	目貫村が矢尾村から分村
1634	寛永11	京極氏の支配下に入る
1638	寛永15	松江藩(松平氏)の預地となる
1687	貞享4	石見銀山代官支配となる
1720	享保5	松江藩預地となる
1811	文化8	杵築，伯耆，淀居の漁民が隠岐に入漁
1818 ～1830	文政年間	隠岐入港の帆船が急増。沖乗りが西廻海運の主体となる
1854 ～1860	安政年間	本土側漁民の入漁地域拡大。「指向」の地名もこの頃できたか
1868	慶応4/ 明治元	隠岐騒動勃発。新政府により島民の行動が容認され，松江藩は隠岐に対する支配権を失う。以後隠岐は管轄の変更を繰り返し，明治9年島根県管轄となる
1869	明治2	この頃から激しい廃仏毀釈運動。
1873	明治6	宇屋，目貫，八尾の3つの小学校設置
1874	明治7	矢尾村，目貫村，東郷村宇屋町を合して西郷港町に
1879	明治12	郡区町村編成法が島根県で施行。宇屋町を東町に，目貫村を中町に，矢尾村を西町に改称。
1885	明治18	周吉外三郡役所として洋風建築の庁舎が竣工
1885	明治18	西郷と本土を結ぶ航路が開設
1888	明治21	3つの小学校が合併，西郷尋常小学校となる
1888	明治21	西郷港周辺で大火災。527戸758棟が消失
1888	明治21	郡役所を廃止，隠岐島庁を西郷西町に置き島司が管
1895	明治28	島後の中央幹線，北方道の改修が完成
1897	明治30	この頃まで西郷は北前船の風待ち港として栄える
1904	明治37	隠岐で町村制施行。西町，中町，東町からなる周吉郡西郷町の成立
1913	大正2	隠岐女子技芸学校開校。現在の隠岐高校の前身
1926	大正15	勅令第147号により隠岐島庁が廃止され隠岐支庁設置
1950	昭和25	国土総合開発法制定
1953	昭和28	離島振興法制定。隠岐全域が第一次指定を受ける
1954	昭和29	西郷町，東郷村，中条村，磯村の1町3村を合併し西郷町発足。同時に港町，岬町の2字が発足
1960	昭和35	西郷町に周吉郡中村を合併
1963	昭和38	隠岐全域が大山隠岐国立公園に編入される
1968	昭和43	隠岐空港供用開始
1969	昭和44	島根県隠岐合同庁舎建築
1969	昭和44	周吉郡，穂地郡の範囲を持って隠岐郡発足
1970	昭和45	西郷中学校，東郷中学校を統合し西郷中学校に改称
1972	昭和47	西郷町役場(城北町日記)完成
1977	昭和52	西郷大橋完成
2004	平成16	西郷町，他3村の範囲をもって隠岐の島町発足
2006	平成18	新隠岐空港開港(ジェット機対応)
2009	平成21	隠岐諸島が日本ジオパーク登録地に認定
2010	平成22	西郷港ターミナルビル増床工事完了
2012	平成24	新隠岐病院開院
2013	平成25	隠岐世界ジオパーク認定
2020	令和2	役場新庁舎での業務開始
2020	令和2	隠岐ジオゲートウェイ供用開始

分化が起こり，湾内の各地に埠頭が建設された。また海岸の埋め立てが進み，港町の西郷漁港から中町のフェリーターミナル前を経て東町をトンネルで貫き東郷方面に至る臨港道路が整備され，海岸線の形も大きく変化した。

また高度成長期には年を追うごとに内陸部へと市街地が拡大している。図-2からは，戦後すぐまでは近世村の範囲に埋立地を加えた部分のみが市街地となっているが，1960年代から1970年代にかけて西町の吉田，隣接する城

北町や栄町で市街地化が急速に進行する様が見て取れる。

近年では高度成長期以降に建設された公共施設の老朽化や，中心市街地の衰退，少子高齢化が進む地域の交流拠点の創出等の課題から，公共施設の再編が計画，実施されている。主なものを挙げれば，2020(令和2)年に完成した町役場の庁舎や，ユネスコ世界ジオパークの拠点施設ジオゲートウェイなどである。

### (3) 西郷港周辺地区の四町の形成史と性格

西郷港周辺地区を構成する近世村由来の4つの町について，インフラと公共施設の整備の歴史に着目して，形成史と地域の性格を示す。西郷港周辺地区と島後のインフラ，公共施設整備の過程を図-3に示す。

#### a) 西町

八尾川と大城山に挟まれた近世の矢尾村の範囲と，高度成長期以降に市街地化した吉田，名田から成り立つ地域である。近世の陣屋は現在のフェリーターミナルに程近い位置にあり，明治以降の島庁・支庁，西郷町役場なども付近におかれ，1950年代ごろまでは政治上の中心地の性格を持つ地域であった。しかしこうした施設は1960～1970年代にかけて郊外や埋立地で急速に市街地化が進むのに合わせ，西町から移転した。例えば近世の陣屋から郡役所，島庁，支庁と名称を変えながらも同じ位置にあり続けた隠岐の政治上の中心施設は，1969(昭和44)年に完成した港町の埋立地にある島根県隠岐合同庁舎に移った。島庁の向かいにあり1907(明治40)年に建築された西郷町役場は，1972(昭和47)年に城北町日記に移転し(この後町村合併により西郷町から隠岐の島町に改称)，2020(令和2)年にさらに内陸部の下西に移転した。このような経緯を経て，西町の西郷，島後における政治の中心地としての性格は薄まっていると言える。一方で戦後に本格的に市街地化した西町吉田には図書館，文化会館，武道館といった文化施設が集中して立地している。

#### b) 中町

概ね近世の目貫村の範囲と，宇屋川の上流域から成り立つ，大城山と宇屋川に挟まれた地域である。西郷港が位置し，町の骨格となる目貫通りは高度成長期の頃には県内屈指の賑わいを見せた<sup>15)</sup>。高度成長期においては臨港道路の整備と旅客埠頭，旅客ターミナルの整備の影響が大きい。近年では西郷港の旅客埠頭，フェリーターミナルの整備，またジオゲートウェイ，ポートプラザなどの施設が整備され，隠岐の島町の玄関口，観光拠点としての性格をより強くするようになってきていると言える。

#### c) 東町

概ね近世の東郷村宇屋町の範囲と，西郷湾岸の地域から成り立つ地域である。宇屋川の左岸に広がり，漁業集落としての性格が特に強い地域であった。明治以降，西

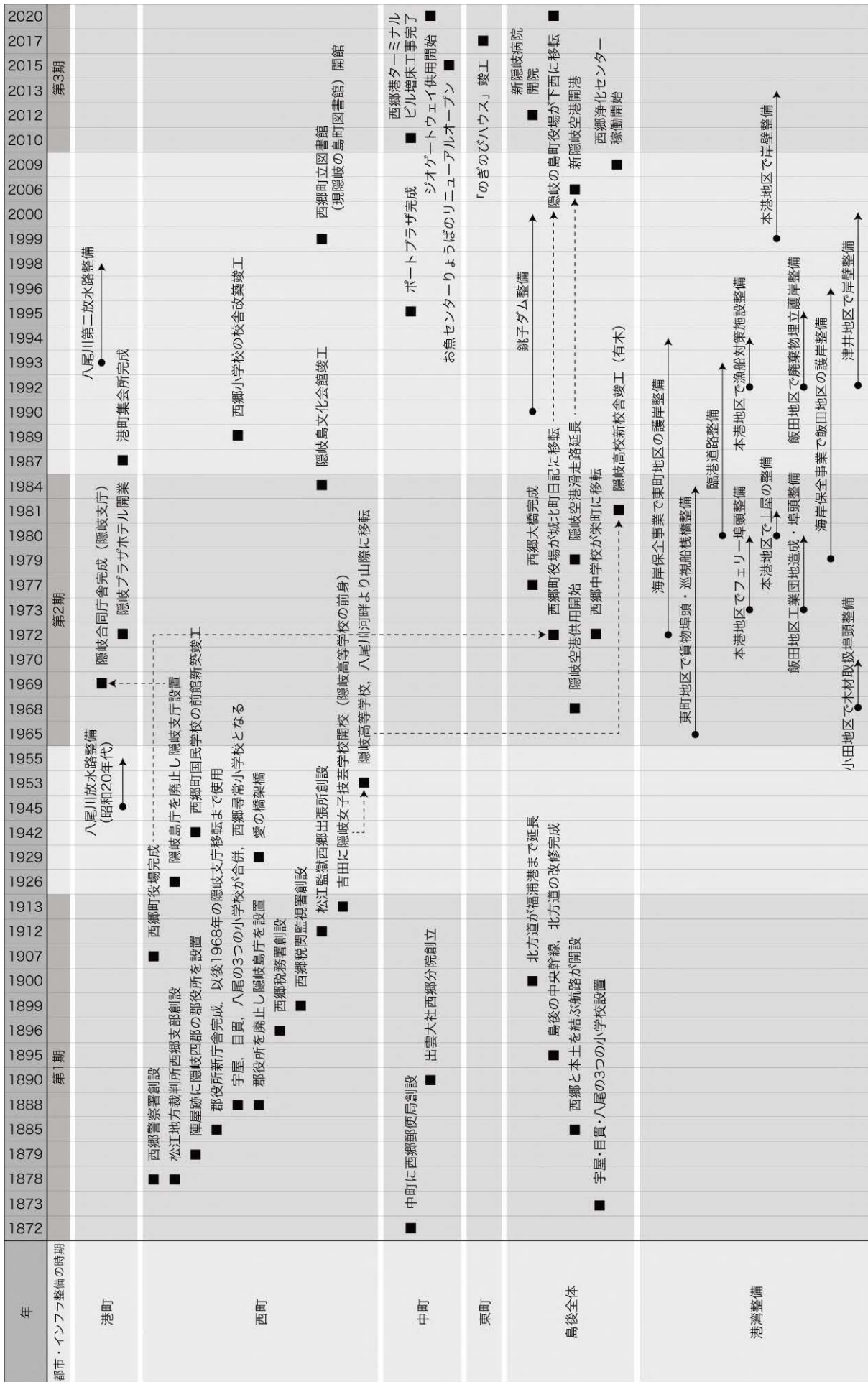


図-3 西郷港周辺地区と島後全体の主なインフラ整備

郷湾岸に沿って北へと集落が形成され、戦後には海上保安庁の埠頭が整備されるなどの変化が起こったが、他の3町に比して空間の変化は大きくない。

#### d) 港町

八尾川右岸の河口部の砂洲を埋め立ててできた市街地で、近世は指向と称した。安政期（1854～1860年）ごろから本土、島前、島後の山間部からの入漁者が移住して開拓、定住した集落であり、他の3町に比して市街地としての歴史は浅い。戦前までに現在の臨港道路より内陸側の範囲ではほぼ市街地化が完了しており、現在でも木造住宅が密集する市街地となっている。高度成長期においては臨港道路とその外側の埋立地が整備され、現在では隠岐合同庁舎等の官公庁施設が立地する地域となっている。近年まで埋め立てによって拡大を続けてきており、基盤整備の影響を最も強く受けている地域と言える。

### 3. 対象地の空間構造の変容と認識との対照

#### (1) 西郷港周辺地区の都市整備の時期

西郷地区の3町の都市空間構造の変遷を表した模式図が図-4である。前章に述べた対象地域各町のインフラ・施設整備は、西郷港周辺地区全体の空間構造の変遷という観点から3つの時期に大別できる。

##### a) 第1期：近世の空間構造の継承

明治から大正期にかけては、西町の島庁・町役場周辺を中心として、官公庁や学校などの施設が整備された。この地域は近世の陣屋跡付近の地域であり、近世からの行政の中心が近代初期においても行政上の中心として整備されたと言える。また市街地も、指向（現港町）で埋立地の拡大とそれに伴う市街地の拡大はあったものの、内陸部への市街地拡大は限定的であり、基本的には近世の都市骨格を引き継いだ状況であった。また前述の通り明治30年ごろまでは西郷は近世末期同様北前船の寄港地として栄えた。この点でも、この時期の西郷の構造は近世末期のそれと大きな変化はなかったことが推測できる。

##### b) 第2期：大規模なインフラ整備と市街地の拡大

第2期は高度成長期以降の整備である。この時期には離島振興政策が推進され、道路や港湾をはじめとした広域インフラの整備と、庁舎や学校などの公共施設の郊外移転が相次いだ。西郷港周辺地区に隣接する城北町や栄町で市街地化が急速に進み、郊外化が一気に進展した。

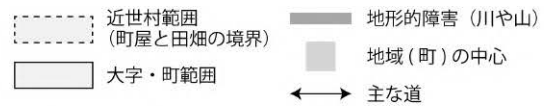
##### c) 第3期：公共空間の再編

第3期は平成20年ごろ以降の整備である。高度成長期に新築されたストックの老朽化と、中心市街地の衰退、過疎化が問題となり、観光拠点でもある中町のフェリーターミナルを中心とした地域の公共施設の再編が行われた。

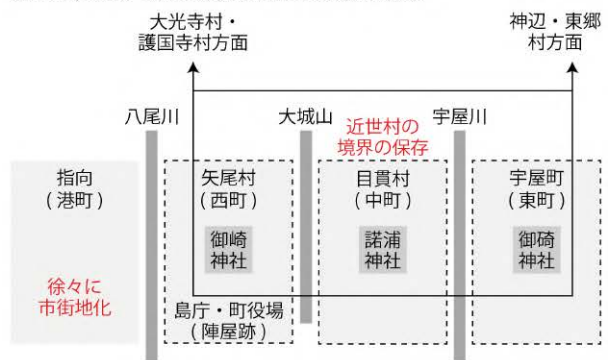
#### (2) 各コミュニティの構造の変遷

一方で微視的に各町を見ると、第2期以降の整備においても、町の境界は郊外の市街地化により広がっているものの、それぞれの町の地域活動の中心はあまり変化がないことが見て取れる。

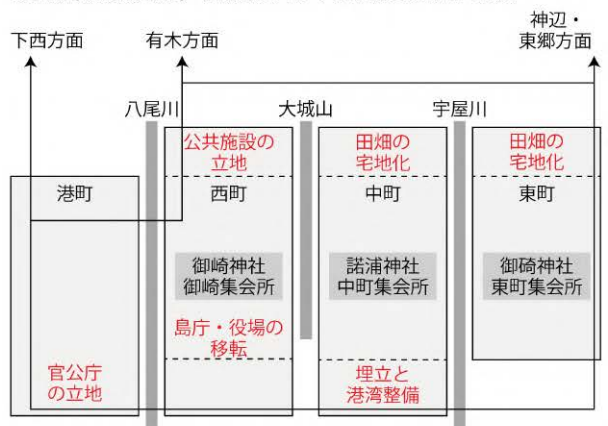
そもそもこれまで着目した公共施設は近世村の範囲の端部にあるものが多い。近世からの政治の中心地であった陣屋・島庁周辺は、西町の端部、中町との境界に近い地域である。フェリーターミナル周辺の施設も近世には存在しなかった埋立地に整備されている。また道路や港



##### 第1期（明治から大正期）：近世の空間構造の継承



##### 第2期（高度成長期）：大規模なインフラ整備と市街地の拡大



##### 第3期（平成期）：公共空間の再編

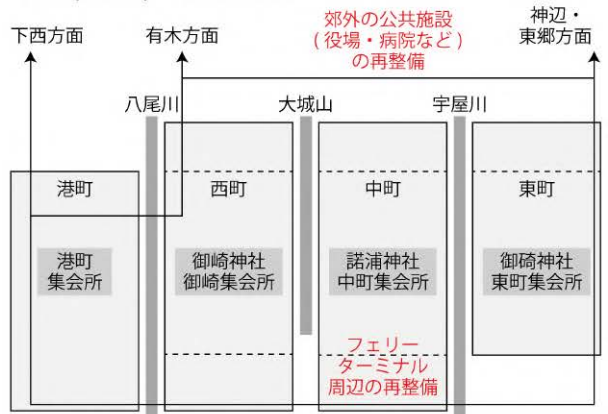


図-4 西郷港周辺地区の空間構造の変遷

湾などのインフラ整備も近世村の外側での整備である。

各町の神社は現在でもコミュニティの中心となっており、港町を除いては各町の集会所も神社に近接する位置にある。本研究では十分に調査できなかつたため言及しないが、近世村の単位は現在の1つまたは複数の自治会単位に置き換えられて保存されており、そうした単位での地域活動の拠点となっているのは各町の住民の氏神である神社であり、またその神社に隣接する集会所である。

### (3) 地域認識との対照に向け考慮すべき点

#### a) 地域認識と複層的な地域構造の変遷の対照

計画反映に向けて地域社会の特徴を捉えるとき、地域の中心や境界に関する認識の把握と、地域形成や現在のコミュニティのあり方から見たその解釈が有効であることは1章4節b項に述べた。

本研究の対象地は近世村を由来とする各町のまとまりと、隠岐の島町・島後の中心たる性格を持つ西郷港周辺地区という大きなまとまりの2つの階層を持った地域である。前2節で述べた通り前者についてはその中心が近世からあまり変化せず境界は外側へ拡大し、後者については中心が都市整備の時期を経るにつれて変化している。こうした地域における住民の地域認識を解釈・分析するとき、認識の理由となる地域活動の範囲などに十分留意し、巨視的な都市構造の変化と、近世コミュニティに由来する現在の各町ないしより細かい小字・町丁単位でのコミュニティのあり方に対してどのように対照し、解釈すべきかを検討する必要がある。

#### b) 都市整備時期と住民の居住・生活歴の対照

上述のように、対象地は大きく3期に分けられるインフラ整備・都市の骨格の変化を経験した。このことから、地域住民の地域認識を解釈・分析する際に、その住民の居住・生活歴と都市整備の時期を対照し、考慮に入れる必要がある。都市整備のそれぞれの時期を経験しているか否か、また実体験はなくとも知識として知っているか否かが、地域認識に対して影響を与えると考えられるためである。

## 4. おわりに

### (1) 本研究の成果

本研究では、対象地域の市街地化やインフラ・施設整備の歴史に着目し、4町におけるそれぞれの空間形成史と、西郷港周辺地区全体の空間構造の変容の実態を明らかにした。また、その結果から、地域住民の地域認識と対照し解釈する際に考慮すべき点について明らかにした。

### (2) 今後の課題

本研究ではインフラ整備や市街地形成の歴史など、空間的な地域形成の歴史についてのみ明らかにした。今後は自治会活動やお祭り、サロン活動などの地域活動の実態と歴史的な変遷を把握した上で、地域住民による地域認識や地域への帰属意識を分析することで、西郷港周辺地区全体での計画策定における主体的な住民参加に対する知見を得ることを目指したい。

### 参考文献

- 1) 隠岐の島町：西郷玄関口まちづくり計画 資料1
- 2) Brown, G., Raymond, C. : The relationship between place attachment and landscape values: Toward mapping place attachment, *Applied geography*, Vol. 27, No. 2, pp. 89-111, 2007
- 3) 福田アジオ：村落領域論, 武蔵大学人文学会雑誌(神田秀夫教授記念号), Vol. 12, No. 2, pp. 217-247, 1980
- 4) 市川秀之：広場と村落空間の民俗学. 岩田書院. 2001
- 5) 山本奏音, 福島秀哉, 渡部哲史：集落形成・生業・地域行事からみた石垣島集落における地域住民の空間認識の特徴, *実践政策学*, Vol. 5, No. 1, pp. 87-100, 2019
- 6) 福島秀哉, 二井昭佳, 岡村健太郎, 五三裕太：復興におけるコミュニティ単位の構造に関する研究—岩手県上閉伊郡大槌町町方・吉里吉里地区の復興事業の実践を通して, *地域安全学会論文集*, No. 39, pp. 175-185, 2021
- 7) 宮脇勝：ランドスケープの歴史文化の活用—イギリスの歴史的ランドスケープ・キャラクタライゼーションHLCの手法, *Landscape Design*, No. 83, pp. 86-91, 2012
- 8) 宮脇勝：歴史的景観キャラクタライゼーションに関する研究 鎌倉市中心部の寺社・道路・街区・水路・土地利用の歴史的景観特性アセスメント, *都市計画論文集*, Vol. 47, No. 3, pp. 607-612, 2012
- 9) 田中豊治：隠岐島の歴史地理学的研究, 古今書院, 1979
- 10) 小坂勝昭：離島「隠岐」の社会変動と文化 学際的研究, 御茶の水書房, 2002
- 11) 島田広之, 田尾俊輔, 小島晋一郎, 中野将, 岩泉達也：住民と大学院生の協働によるまちづくり活動の展開：島根県隠岐の島町での活動報告, *Co\* Design*, No. 8, pp. 49-74, 2020
- 12) 小林裕和：着地型観光の再解釈と地域観光企業 島根県隠岐旅工舎を事例として, *観光マネジメント・レビュー*, No. 2, pp. 2-11, 2022
- 13) 野辺一寛：隠岐世界ジオパークの誕生：世界が認めた隠岐の魅力（〈特集〉ジオパークにおける地学教育のあり方を探る）, *地学教育と科学運動*, No. 73, pp. 5-6, 2014
- 14) 中村安孝：隠岐島誌全, pp. 124, 名著出版, 1972
- 15) 隠岐の島町：西郷港玄関口まちづくり計画, p. 2, 2020